

# 集

俳句フォーラム

2005年7月 第16号

## あけぼの句会

うす墨桜

田村時与

春木立過去を忘れ出でゆけり  
董草摘み取りそうなわが右手  
集う日の花の見頃を推し測り  
一房のうす墨桜に或る想い  
囀や鎮守の杜の孔雀小屋

茶筌振る

大森桂子

「弱法師」を謡う媪や白鉄線

悪人も善人も無き花の下  
独りごと言うは恐ろし花林檎  
日脚伸び頂き直すいのちかな  
百回を習いて朧茶筌振る  
角の数 浦川哲子

永き日や金平糖の角の数  
少年の中に青年松の花  
坊ちゃんも山嵐もいて青き踏む  
春の風邪エレベーターに押し込まる  
春蘭の一鉢抱いて退院す

随想

大森桐明さんのこと

大森桂子

もう三十五年も前のことになるが、結婚してすぐ小平にある大森家の墓参りに行った。夫は三歳の時父を亡くしている。正面の臺の右側に小さな「桐明之墓」があつた。裏に「じゃがいもの花になぐさむ夏野かな」の句が彫られていた。

桐明とは夫の父、義富の兄のことで、この墓は「お弟子さんが建てて下さつた」と義母は言つた。俳句に全く縁のなかつた私であつたが、十数年経ち、公民館の俳句講座に出るようになり、義母から桐明の掛軸を見せて貰つたり、法事で昔話を聞くようになって、大森桐明という俳人に興味をもつようになった。

本名、留郎。明治三十二年岡山生まれ。父健八郎は紡績業を営む。三兄、一姉、一弟。岡山中、岡山六高、東京帝国大学機械工学科卒業後、東京毛織に職を得たが三年後退職し、福井高等工業の教授、金沢高等工業、旧制一高、府立高等学校の講師を務める。六高で志田素琴師（一八七〇—一九四〇）に俳句の手ほどきを受け、上京後は師の勧めで大須賀乙字（一八八〇—一九〇〇）に師事。乙字のもと「懸葵」で活躍。吉田冬葉、内藤吐天と共に在京二羽鳥と称せられたと言つ。乙字は死の前年、二十歳の桐明、冬葉を連れ戸隠山へ行つてゐる。

乙字没後、「中心」（高松昭允編集）の選者になるが、

四年後同誌が休刊になったこともあつて、その頃俳句から遠ざかつていた数年があるようだ。二十代後半、腎臓炎のため京都帝大付属病院で大手術を受け奇跡的に助かつたが、それが彼の宿痾となる。病後、自ら「一生の哀樂を託した」と言つように俳句に真摯に向き合うようになる。そのひとつに婚約者砂澤年子の病死も原因しているのではないかと考える。彼の入院中、親しく看護してくれた年子を、かりそめの病にて失つてしまつ。以後桐明は独身を通した。

昭和四年「草上」同人及び選者となる。翌年は福井高等工業卒業生を伴つて上海、蘇州の旅へ出る。又、その年、村山古郷の妹たか女の遺句集「桃花帖」を編み跋を書いている。親友の葵郷、たか女も俳句友達であつた。たか女は年子と同じ年の生まれで、二十三歳で亡くなつてゐる。何年か後、葵郷は桐明に結婚をすすめた事があつたが「年子やたか女のような女があれだね」と言つて耳を貸さつとしなかつたと書いている。本格的に俳句、俳論に取り組むようになった桐明は伊東草月（一八九〇—一九四〇）の「草上」で腕を揮つ。「作句、評論両面において、最も忠実に乙字の血脈を守り受け継ぎ、剛毅峻厳の人となりも乙字を彷彿させる」と古郷は語る。

さて、乙字とはいかなる俳人なるや。

明治十四年、福島生まれ仙台一中より俳句をはじめ、旧制二高、東京帝国大國文科在学中、碧梧桐門下に入り、碧梧桐が三千里大旅行に出立するや同門らと大いに活躍し、三題集はじめ碧門黄金時代を築く。古典に暗示性の高い句を見出し、それを根拠に「俳句界の新傾向」を発表した。新風を望んでいた碧梧桐はこの論を唱道し、全国に広めた。季題を背景として心情や情緒を暗示させる方法、人事を詠みそこに詩情を漂わせる、それが碧梧桐の理解した「新傾向」である。乙字の考える俳句の理想は古典の中にあつた。新傾向は乙字の求める俳句ではなくなつていった。

大正元年、虚子が「ホトトギス」に俳句を復活させ、虚子、碧梧桐、乙字は俳壇に異なる三つの場を作り出し、以後その対立がさまざまに転回していく。乙字は碧梧桐と袂を分かち、井泉水「層雲」とも断ち、激しく新傾向を攻撃する。又「ホトトギス」の守旧主義に厳しい批判を加える。臼田亜浪の「石楠」を援け、「懸葵」に「二句一章、音調論、季題論等画期的な俳論を発表した。乙字は生涯主催する俳誌を持たなかつた。乙字ほど俳壇的に有名で俳誌を持たなかつた人は珍しく、俳壇の野心の全くない人だつた。伝統尊重、古典復帰の論陣を張り、自然がある故に俳句は存在し、自然と離れては俳句はないとした自然万能主義に徹した。四

十歳でスペイン風邪に罹り、大正九年に没した。

火遊びの我れひとりあしは枯野かな

木揺れなき夜の一寸時や霜の声

妙高の雲動かねど秋の風

桐明は草月と文法上の争いから「草上」を去ることになる。昭和七年三月句会に端を発し、誌上での互いの意見のぶつけ合いを経て素琴、吐天、桐明の三人連名で「吾等思ふ所あり今月号限り本誌と關係を絶つ」との脱退宣言を八月号に出している。文法上の解釈の相違からではあつたが、感情的な対立もあり、桐明の潔癖で一徹さ、寛容さに欠ける性格が事態を深刻化させた。渦中にいた古郷は書いている。

同年十一月、素琴を擁して桐明は「東炎」を創刊し主要幹部となる。この結果、乙字派といわれる俳誌は「獺祭」(冬葉)、「草上」、「東炎」の三誌となる。乙字が生前最も力を尽くした「懸葵」は、大谷句仏上人の主筆となり、乙字系ではあつたが門流とはいえなかつた。その後乙字派が次第に衰退していったのは、分裂と対立によって相協調する精神を失つていたためだろう。それは乙字門流にとつて何より大きな不幸であつたといわざるを得ない。と『昭和俳壇史』に古郷は書いている。

「東炎」は、同じ岡山六高卒の内田百閒（桐明より十歳上）が句や随筆を発表、「芭蕉の伝記の研究」で昭和十二年文学博士となる素斐が、俳文学研究諸論を掲載、土居蹄花が「若菜集」、村山葵郷が「修練集」、吐天が「林泉集」、桐明が「行路集」の選をしている。百鬼園俳句会での主要幹部の忌憚ない会話が載ったり、ユニークな俳誌として注目された。桐明は「東炎」に多くの俳論を発表、「俳句研究」に「大須賀乙字論」（昭和九年）。又遡つて四年には「明治大正俳論史」（子規・漱石・虚子・碧梧桐・乙字）を「俳句講座」に発表、芭蕉研究の論も多い。

私が大変面白く読んだのは「鬼城氏の反省を求む」という小文。乙字師によつて鬼城句集が世に出、有名になつたにもかかわらず、その恩義を忘れ「乙字君」などと書いていると、憤慨に堪えない桐明の感情が顕な文で、彼の性格がかいま見られる。毒舌家と言われた師、乙字と共通するものがあつたのかも知れない。

昭和十一年、桐明は新宿区左内町の姉山田愛子宅隣家に、両親と共に迎えられる。長兄斌彦は京都帝大を出、神戸で開業医をしていたが、天皇崩御の時は地元医師として控えた。その評判で繁盛したといつが、子は無く、昭和十一年死亡。次兄次彦は中学出、要領よく浪費家だったが、母富は叱らず可愛がった。子供

は三人いたが昭和二年没している。二男輝雄は月謝不要の上海の学校を出、日本郵船に入る。一男五女をもつけ、しばらくは廣東にいた。昭和十二年輝雄を残し一家は帰国し、妹愛子が捜してくれた牛込の家に住む。輝雄は二百五十円の収入から百五十円を妻に送り、妻ハルはその半分の七十五円を左内町の両親に渡していたと言つ。残りでやりくりするのは大家族で大変だつたと長女信子は振返る。輝雄夫妻は愛子に両親の世話をお願いするため、生涯律儀に誠意を示し通した。愛子の夫山田康太郎は鳥取出身、京都三高、帝大を卒、後に日本軽金屬会長となる。愛子は四歳年下の桐明をとても可愛がり、彼が結婚しなかつたこともあつて、生涯家族のひとりとして大いに助けている。五男義富は東京帝国大を出、日本セメントに入社、福岡、熊本を転勤し四男一女をもつける。妻須美は、義富が盲腸になつたと姉愛子に知らせたら百円送つてきて驚いた、と話したことがある。愛子はとても面倒見がよく太つ腹な女性であつた。五男一女の兄弟は、多く三十代、四十代で没しているが、輝雄と愛子は長命であつた。父健八郎は十二年没。

桐明の句集『高原』は、「東炎」の表紙担当の織田一磨画伯の美しい高原の花の木版画が所々に挿入されている。桐明死の前年、二十三年間の四百二十三句が

載っている。病以来、好きな登山もままならず「せめて高原に春の芽吹きを喜び、秋の霧の香をなつかしみ……『高原』と名付けたと言つ。

峡大観にをればしぐるゝ紅葉かな

秋の雲奥の大湖を今見たり

山霧雲となる川霧は森に消ゆ

三句目は、彼の代表句である。

「私は俳句は自分の実経験を詠むべきものと思つてゐる。これは私の信念である」との弁がある。

『高原』の中から私の好きな句をあげる。

竹かつぎ来るゆさゆさと月下かな

乏しけれど春めくものに著とりぬ

ゆくりなう雛の酒に酔いにけり

鉄砲百合梅雨明けの水吐きにけり

いとど跳ぶ音ほとほとと梅雨晝

つれしさはただ秋草に眼を落す

雪ちるやいつまで浮かめ鳩の首

『高原』を上梓した後母親が亡くなり、その五ヵ月後の二月二十二日、四十歳で桐明も一生を閉じる。十

六年四月号の「東炎」は追悼号、「俳句研究」四月号には志田素琴が四頁に涉つて「大森桐明君を悼む」を載せている。弟義富はこの時は東京に住んでいたので、姉愛子と共に力を貸している。追悼の中で「兄は全く偏屈な位むづかしい男でした。一寸した事でも正しいと思ふ事に就いては口を尖らして、誰が何と云はつと真剣な眼さして彼の信する事に邁進すると云つた性格でした。それが彼の良い所であり、且つ悪い所でもあった様です。」この数年のうちに両親、兄、弟を失つた愛子の嘆きはいかばかりであつたらう。この後「桐明忌」として、同門の方が愛子宅に集まつたりしている。愛子の二男充郎は、最も桐明の近くにいた一人であるが「和魂洋才」の人と叔父桐明を語る。

桐明没後六十年以上経つてしまひ、桐明を知る人も少なくなつてしまつた。俳縁というのおおこがましいが、彼を調べていくうちに、会つたことはないが、身辺にこのように活躍し、己の道を極めた人がいたことに感銘を受けた。

私の家から二キロ程の所に天然記念物の牛島の藤がある。『高原』で前書きのある桐明の句に出会つてからは、毎年のように足を運ぶようになった。

日影落ちて今し藤浪揺れんとす

桐明

## 有楽町メセナ句会

マスク 岡田芳べえ  
背負われて櫛山やつと雪もよい  
春隣ハガキ一枚出す散歩  
マスクして捨てられぬ本捨てにゆく  
齒の欠けた夫婦が笑う春隣  
オフェリアに添って流れる花のかず

鳥帰る

伊嶋淡々

春かすみ足組み替える半跣仏  
雪解の軒の雫を手水とす  
噴煙のまぎれしあたり鳥帰る  
花びらをあまた沈めし濠の色  
五分搗きの米のとき汁沈丁花  
罅走る 八木蝉息  
そぞろ寒俳句の道が折れ曲がる  
早春の山々肩出す膝を出す  
早春の空のあちこち罅走る  
芳べえが芒見てある露天風呂  
弟に姉が馬乗りチューリップ

鎮静剤 岡本久一  
家訓なし遺産もなくて蜆汁  
吊るされて鮫鱈空を呑み込みぬ  
枝先に一カラットの春の雨  
水温む槽の鯰に鎮静剤  
ありもせぬ尻尾の先まで春愁ひ

割礼日

霧野萬地郎

元旦や電子レンジは回り出す  
秘め事をふと漏らしけりチューリップ

トルコにて

イスラムに裸像立つ春近代化  
春寒や木馬の胎に中国人  
少年の目の冴え返る割礼日

萌える

根本随縁

春萌える塀にこぼれる うめ・こぶし  
豪雪と地鳴りに怯えやつと春  
いと柳池の面掃いてツバメ待つ  
あかあかと廃屋照らす桃木立  
バチカンの追悼よそに花見酒

寒 椿

森須 蘭

椿を焚く既に純真とは言えず  
冬薔薇の表面張力という青空  
寒椿まとめきれない空である  
仰向いて銀河繋いでいる裸体  
ささくれの痛い中指久女の忌

バーコード

樋口愚堂

バーコードで読み解く濁世路の臺  
鳥雲にホチキスの弾撃ちまくる  
疾走する冬の土蜘蛛地雷原  
啓蟄やS字結腸蠕動す  
鶴引くや空港公団解体さる

## 鈴の会

駅跡

貝田遊山  
うまや

蒲公英や旧東海道の駅跡  
漁具船具売る店に猫春隣  
春寒し体の不思議小宇宙  
淡雪や古墳調査の人の肩  
生きる事まだ飽きもせず鯖食う

月影

若泉真樹

尾長来て啄みしあと梅の花  
春の鷹野に扁平な影落す  
広がりにし噂の波紋葦の角  
月影という白椿薬師仏  
春の鯛口髭似合う若きシェフ

命

馬場龍雨

ひとひらの花は先達の命なり  
亡き友の妻の訃報や雪の空  
瞬くは友中天の冬銀河  
五月逝くあの目あの声あの笑顔  
御仏に縋る衆生に青嵐

寒禽

浦野里山

寒禽の一声のこし隠り沼  
とり年の寒九の水を捧げ飲む  
鶯替の碑に鶯止まり太鼓橋  
楓の芽羅漢は耳を欬てり  
耳寄せて土偶の言葉春の昼

春炬燵

御古ゆたか

降り頻る雪を駅婦が搔き発車  
息子去る庭の千両に鳥遊ぶ  
小児科の思い出指切り春浅し  
ビル群の靄いを制し春の富士  
書に倦むやうたた寝にも倦む春炬燵

同窓会

杉山涼風

鶯替えの行列を避け詣でけり  
風邪の娘の熱の敷布を三度替え  
波止場飛ぶかもめの眼寒土用  
手に取れば消えゆく命牡丹雪  
君づけの同窓会や花三分

寒

石山佳仙

孫に齒の生え初めし日の芽吹き風  
黒猫を見下ろしている寒鴉  
寒稽古モワと湯気立つ面とれば  
ごわごわに凍てつく胴着そっと着る  
うちそともともに静かや雪の朝

君子蘭

佐藤 仁

待春やリクルートスーツの硬き襟  
残業やケータイ越しの鬼やらい  
細雪終電を告ぐ電子音  
球根の根の絡みあい月朧  
高層階の陽を傲慢に君子蘭

藪 椿

福山至遊

優しさはときには不善実朝忌  
若者の未来に口を出し余寒  
小でまり咲く脇の甘さを武器にして  
藪椿縄文遺跡は虚ろにて  
犬ふぐりうつむく人の目に優し

# 白山句会

春 隣

西村慧子

廻廊の凍や三猿かしこまる  
店前の風荒くとも春隣  
紅梅や顔くばかり汀女の句碑  
何も無い茶店灯が点き春の雷  
梵鐘と係わり合ってふくらむ芽

花のいのち

浦川哲子

さくらの芽つす紅いろの気をまとい  
春なれや一つ乗り越す大江戸線  
花万朶水辺の暗み磨崖仏  
花散らす肩車の子の双手かな  
花屑は土に帰りて老い深む

寒 椿

川越静子

廻廊の果てなり茶席寒椿  
帝釈天春色染みて「火宅の図」  
垂れ梅汀女の句碑のたたずまい  
大楠に身をあづけおり雨水かな  
風船は梅見の人を天に向け

雨の梅

都築繁子

休航の矢切の渡し鴨群れる  
料亭の寂雪吊りの縄の揺れ  
ほのぼのと灯す梅見の雨の茶屋  
飯店舗飯設舞台も雨の梅  
春光やクレーンの先の石灯笼

雌 雄

佐藤喜孝

春の鴨流れてゐるにあらざりし  
春の鴨ベンチに収支決算書  
春陰や石と苔とのあはひの字  
糸柳烏に雌雄ありにけり  
枝えらび春の鴉となりにけり

池之端 芝 尚子

彫刻は寒の玻璃越し帝釈天  
冬麗の指呼の対岸真間の森  
雨雫飛び梅白に紅の添ふ  
三方はビルの林立春の池  
春鴨の深眠りして池の端

都の春 田中藤穂

芽柳や弁天堂に人の混む  
椿散り梅咲く径をゆつくりと  
しら梅の天神様に狸穴  
春なれやはぐれし人の行方はも  
都の春人に酔ひたる大男

梅 見 平野無石

傘さして梅の女時に逢うことも  
雨男 雨女ぬて梅見かな  
塔の影よぎるポートや柳の芽  
雀寄る包丁塚や水ぬるむ  
下町の風情に溶けて春の鴨

花あかり 伊藤雅子

骨董の壺ふくよかに花の雨  
喧騒のあとの静寂散る桜  
黄色いスミレ十五歳の聖女の絵  
桐下駄の鼻緒あい色花の雲  
ヴェネツィアングラスの向こう花あかり

飛 梅 松村東亜未

年繩を詠へ柴又瑞龍松  
江戸川辺冬芽光りし猫柳  
飛梅や江戸に降りて三分咲  
色のなき空に紅梅汀女の碑  
ひとひらが梅見の泥についできし

水温む 植木やす子

くれないの梅に誘われ汀女句碑  
冬晴や寅さんの像草履ばき  
赤き芽やはじめてみれば猫柳  
二羽の鴨ぐるぐる廻り春の水  
枯蓮の丈は揃いて水温む

うねらす

長南憲章

洋館の中の茶室や猫柳  
白山の杜をうねらす青嵐  
黄菖蒲を映して水面波立てり  
薫風を絵の具にまぜて画布に塗る  
杜小径天蓋のごと若楓

うつうつと

大山夏子

かつしか野今も冬青草を踏む  
回廊の床冷え水の音幽か  
飛梅の香や雨が消す過去未来  
新しき杭がうたれて糸柳  
うつうつと池の真昼を春の鴨